

キャンプ経験が不登校児童・生徒のコンピタンスと抑うつ傾向に及ぼす効果

兄井, 彰
福岡教育大学教育学部

<https://doi.org/10.15017/9044>

出版情報：生活体験学習研究. 4, pp.25-34, 2004-01-30. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

キャンプ経験が不登校児童・生徒のコンピタンスと抑うつ傾向に及ぼす効果

兄 井 彰

The Effects of Camp Experience on Perceived Competence and Depression of Elementary and Secondary School Refusers

Anii Akira

要旨 本研究では、参加した不登校傾向を示す児童・生徒の各キャンプに対する事後の印象と自己有能感（コンピタンス）及び抑うつ傾向の調査から、さまざまな体験ができ、シリーズで年間通して行われるリフレッシュキャンプが持つ教育的効果を明らかにしようとした。

その結果、成功体験が多いキャンプで楽しかったと答えた子どもが多かった。このことから、できるだけ多くの成功体験ができるキャンププログラムの工夫が示唆された。

また、自己有能感と抑うつ傾向は、各キャンプ前後で、子どもにとって望ましい変化が認められた。このことから、キャンプ全体を通して考えると、本キャンプのようなさまざまな体験ができ、年間複数回行われるシリーズキャンプは、不登校児童・生徒に対して一定の教育的効果があると考えられる。

しかし、期待した以上のキャンプの効果はみられなかった。これは、本キャンプの活動がどちらかといえば楽しさ中心の内容が多く、克服や達成を伴う活動をあまり多く体験できなかったためだと考えられる。あるいは、本キャンプは、複数年度にまたがって参加している児童・生徒が多く、初めて体験する活動が少なかったためだと推察される。

キーワード キャンプ、不登校児童・生徒、不登校、有能感、抑うつ

Abstract The purpose of this study was to examine the effects of camp experience on perceived competence and depression of elementary and secondary school refusers. The subjects were long-term refusers who participated in 7 times refresh camps conducted through 2002. The perceived competence of subjects was measured with the Birlson's scale, and, Birlson's scale was administered in two times before and immediately after camp. To measure the depression, the KU Competence Scale (Shinohara and Katsumata, 2000: 2001) was administered at same time the Birlson's scale. The following results were obtained; the school refusers who participated in 7 times refresh camps show significant positive changes in perceived competence and depression after the each camp. The results suggest that the camp experience has a positive effect on elementary and secondary school refusers.

Key word: camp, school refusers, school attendance, perceived competence, depression

連絡・別刷り請求先 (Corresponding author)

福岡教育大学教育学部 (〒811-4192 福岡県宗像市赤間文教町1-1)

Faculty of Education, Fukuoka University of Education (1-1 Akamabunkyomachi, Munakata City, Japan 811-4192)

はじめに

いじめや不登校などに代表される青少年の問題行動の背景に、さまざまな体験活動の不足が指摘されている(服部、1984)。中央教育審議会第一次答申(平成8年7月)や「児童生徒の問題行動等に関する調査研究協力者会議報告」(平成8年7月)では、このような問題行動の対策として、青少年の体験不足を補うために、青少年教育施設等の活用や学校外での体験活動を促進する体制作りが提言されている。

不登校の問題に限っても、数多くの提言や対策がなされ、適応指導教室の設置やフリースクールの増加、青少年教育施設での自然体験活動を中心としたさまざまな体験が可能な事業などが実施され、学校外の指導体制が整いだしている。

国立オリンピック記念青少年総合センターの報告(1998)によると、都道府県教育委員会、市区町村教育委員会、青少年教育施設(全国青年の家協会または全国少年自然の家連絡協議会加盟施設)を対象とした調査では、不登校児童・生徒を対象にした170事業も行われており、その事業のねらいとして重視された事項は、①対人関係能力、②自主性・自立性、③自然体験の順であり、その主な活動は、自然体験活動を中心とした野外活動型のプログラムが多かったとしている。

このようなキャンプなどの自然体験活動が、青少年に対して一定の教育的効果を持っていることは、多くの先行研究から明らかとなっている。例えば、児童・生徒がキャンプを体験することで、自己形成や自己実現に関する態度や意欲といった自己概念(飯田ら、1988; 飯田ら、1986; 井村、1982)や実際にその行動を行うことができる自信といった自己効力感(飯田・関根、1992; 関根、1994; 関根・飯田、1996)の向上がみられる。また、キャンプ体験は、児童・生徒が望ましい人間関係を作るための社会スキルを向上させ(西田ら、2002)、協調性を育み(平田・叶、2001)、友だちづきあいを深めること(松永ら、1999)が確かめられている。さらに、児童・生徒の自然に対する意識が、キャンプ体験で肯定的に変化することも確認されている(川村ら、1994; 岡村ら、1996; 橘ら、1991)。これらの研究を集約すると、キャンプなどの自然体験活動を行うことにより、①自己への効果、②対人への効果、③自然への効果が期待できるといえよう。

また不登校児童・生徒を対象としたキャンプなどの自然体験活動の効果についても明らかにされている。不登校児童・生徒がキャンプ経験をすることで、自己概念を高め、不安を解消し(飯田・中野、1992)、社会性を高め(飯田・小島・有坂、1991)、さらに親子関係に改善がみられること(飯田・中野・関根・布目、1993)が報告されている。これら多くの実践を行っている飯田(1994)は、不登校児童・生徒を対象にしたキャンプ(療法)の特徴として、①親や家庭を離れていての生活体験、②自然の中での生活体験、③小集団での共同生活体験、④キャンププログラムにおける成功体験を挙げ、これらの自然体験活動を能動的に行なうことにより不登校児童・生徒の行動変容や家族及び人間関係の改善がみられると述べている。

また、Gibson(1979)も、治療的キャンプに関する文献を展望した結果、その目的として、①行動変容、②情緒的適応の向上、③自己概念の強化、④他者との関係の改善の4つであるとしている。さらに、キャンプの治療原理として、①自然そのもの持つ性質、②グループ体験、③学習理論の3点に言及しているものが多いと指摘している。

本研究は、以上のような不登校児童・生徒に対する教育的効果を期待して、福岡県少年自然の家「玄海の家」で行われた「玄海! ハート to ハートキャンプ21」において、不登校児童・生徒を対象に調査を行った。この事業は、平成14年度に文部科学省が委託した「非行等の問題を抱えたり、不登校等で屋内に引きこもりがちな青少年等悩みを抱える青少年に対し、自然体験や生活体験等の体験活動に取り組むモデル事業を国公立の青年の家・少年自然の家等で実施する」ことを趣旨とする「悩みを抱える青少年を対象にした体験推進事業」で、福岡県少年自然の家「玄海の家」において過去5年間にわたり宿泊日数や活動内容を少しずつ変更しながら不登校児童・生徒のリフレッシュキャンプとして実施されたものである。このキャンプの詳細は後述するが、「家に引きこもりがちで、不登校傾向が見られる児童・生徒を対象に、学校・家庭とは異なった自然環境や生活環境の中で、集団生活をとおして、豊かな体験活動の機会を提供し、自主性、社会性、協調性、コミュニケーション能力を養い、子どもの自立を育む」ことを趣旨として実施され、年間7回シリーズで、の

べ17泊24日という長期間のキャンプであった。

本研究では、先行研究(飯田、1994；飯田ら、1991；飯田・中野、1992；飯田ら、1993)を参考にして、特に、不登校児童・生徒の心理的・行動的な変容の要因と考えられる自尊感情について調査を行った。平成11年7月22日に青少年問題審議会が公表した『『戦後』を超えて—青少年の自立と大人社会の責任—(答申)』では、いじめや不登校などに代表される子どもたちの問題行動を起こす子どもの特徴の1つとして、「社会の基本的なルールを遵守しようとする意識が希薄になっている」と併せて、「自分自身に価値を見だし、自尊の感情を持つことができないでいる」ことを指摘している。本キャンプに参加した児童・生徒においても不登校傾向を示すことで自尊感情が低下していると考えられる。しかし、本キャンプにおいてさまざまな活動を通して成功体験に触れることで、自尊感情が高まると思われることから、各キャンプ前後で調査を行った。この自尊感情は、家庭・学校・遊びなど存在価値を認められ、自己の成績・能力に自信を持つこと、すなわち、自己有能感(コンピタンス)と関連している(勝俣・篠原、2000；2001；篠原・勝俣、2000；2001)。そこで、自尊感情の指標として自己有能感(コンピタンス)を採用した。

また、この自己有能感の低下によって、最近の子どもにも多く見られるようになった興味・関心の喪失や無

気力といった抑うつ傾向がもたらされているとの指摘(村田、1999)があることから、参加児童・生徒の抑うつ傾向も同時に調べることにした。

方法

1. キャンプの概要

平成14年6月から12月まで、各月1回の頻度でキャンプを行った。各キャンプのねらいは表1に示す通りであった。また、キャンププログラムの詳細は、表2に示す通りであった。主なプログラムは、初夏には乗馬やサイクリング、夏には、マリンスポーツや離島キャンプ、秋には、目的地に着くまで行き先が分からないミステリーツアーや交流バザー、冬には、スケートやスキーなど、さまざまな体験ができるように計画した。また、①さまざまな直接体験の場を設定し、②各班の裁量による選択プログラムの活動場を設定し(班別おまかせプログラム)、③子どもたちが人前でスピーチ(話・発表)をする場を段階的に取り入れ、④状況に応じて柔軟なプログラム変更を行い、⑤子どもたち同士、あるいは班付きスタッフと子どもたちが、ゆつくりと打ち解けられるだけのミーティングの時間(ハートタイム)を多く(毎日)とり、⑥段階的に他の機関(団体)と交流する場を設定するように配慮した。

表1 各キャンプのねらい

| キャンプ名 | ね ら い |
|-----------------------|---|
| 第1回 出会いキャンプ | 「仲間づくり」のためのゲーム等を通して、参加児童・生徒同士が心のふれあいを深めていく |
| 第2回 マリンキャンプ | マリンスポーツ等で仲間との交流することを通して、自己存在感を認識していく |
| 第3回 アイランドキャンプ | 離島キャンプのなかで未体験の活動に挑戦したり活動を選択したりして自主性・社会性を養っていく |
| 第4回 オータムキャンプ | キャンプ前半を振り返って、今までの活動を確かめあい、ワークショップ等で仲間と過ごすよさを感じ取っていく |
| 第5回 ミステリーツアーキャンプ | 親しくなった仲間と共同体験をして、それを伝え合う活動を通して、コミュニケーション能力を養っていく |
| 第6回 アクティブキャンプ | ウィンタースポーツ体験や福祉施設の人との交流を通して、自分や仲間のよさを発見し協調性を養っていく |
| 第7回 See You!! キャンプ | キャンプ全体を振り返り、活動の成果を確かめ合い、仲間と生きていくことの素晴らしさに共感する |

表2 キャンププログラムの概要

第1回出会いキャンプ

| 日付 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 |
|--------|------------------------------------|---------------|----|------------|-----------------|------|---------------------------|----|-------------------------|------------------|------------------|--------------|----|----|----|
| 6/7(金) | スタッフミーティング | | | | 受付開始 | 開会行事 | アイスブレイキングとテント設置 保護者説明会 | | アウトドアクッキングⅠ (バーベキュー) | | ハートタイム (自由時間) | 幕営 (テント泊) | | | |
| 6/8(土) | アクティブタイム(サイクリングで乗馬場まで約3km) 乗馬体験 | | | | スーパーで 夕食の買出し | | アウトドアクッキングⅡ (班別の献立) | | 施設内に移動 入浴 | ハートタイム (自由時間) | 消灯 (施設泊) | | | | |
| 6/9(日) | 動物ビンゴ大会 (ゲーム大会) | おわりのつどい 解散 | | スタッフミーティング | | | | | | | | | | | |

第2回マリンキャンプ

| 日付 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 |
|--------|----------------------|---------------|----|------------|-------------------------------|-------------|---------------------|--------------|---------------------|------------------|------------------|-------------|----|----|----|
| 7/4(木) | スタッフミーティング | | | | 受付開始 | はじめの つどい | マリンスポーツⅠ 海洋カヌー体験 | | タベのつどい 夕食 | 音楽を楽しもう ライブ演奏 | ハートタイム (自由時間) | 消灯 (施設泊) | | | |
| 7/5(金) | マリンスポーツⅡ バナナボート体験 | | 昼食 | | マリンスポーツⅢ ニッパーボード・ポディーボード体験 | | | タベのつどい 夕食 | 夜空の会 (天体観察・星のお話) | ハートタイム (自由時間) | 消灯 (施設泊) | | | | |
| 7/6(土) | レクリエーション ドッチビー大会 | おわりのつどい 解散 | | スタッフミーティング | | | | | | | | | | | |

第3回アイランドキャンプ

| 日付 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 |
|--------|---|-------|---------------|----|-------------------------|-------------|--------------------------------------|----|----------------|------------------|--------------|------------------|--------------|----|----|
| 8/7(水) | スタッフミーティング | | | | 受付開始 | はじめの つどい | 筑前大島に出発 (徒歩7kmとフェリーで移動) | | キャンプ場作り 入村式 | 夕食 | ナイト スイミング | ハートタイム (自由時間) | 幕営 (テント泊) | | |
| 8/8(木) | アクティブタイム(班別選択活動) 海水浴、釣り、島内散策、キャンプファイヤーのスタンツの準備など | | | | | | アウトドアクッキングⅢ (イカを使ったバリエーションイカリヤ作り) | | キャンプ ファイヤー | ハートタイム (自由時間) | 幕営 (テント泊) | | | | |
| 8/9(金) | 撤収 | 温泉に入浴 | 自然の家へ出発 昼食 | | 自然の家へ出発 (徒歩とフェリーで移動) | | おわりのつどい 解散 | | | スタッフミーティング | | | | | |

第4回オータムキャンプ

| 日付 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 |
|--------|-----------------------------------|---------------|----|------------|------|-------------|------------------|----|--------------|----------------|------------------|-------------|----|----|----|
| 9/5(木) | スタッフミーティング | | | | 受付開始 | はじめの つどい | サンドアート作り 砂の芸術 | | タベのつどい 夕食 | ナイト アドベンチャー | ハートタイム (自由時間) | 消灯 (施設泊) | | | |
| 9/6(金) | ワークショップⅠ・Ⅱ(みんなでバンガローを作ろう) (昼食) | | | | | | | | タベのつどい 夕食 | ワークショップⅢ | ハートタイム (自由時間) | 消灯 (施設泊) | | | |
| 9/7(土) | ワークショップⅣ | おわりのつどい 解散 | | スタッフミーティング | | | | | | | | | | | |

第5回ミステリーツアーキャンプ

| 日付 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 |
|---------|--|---|----|------------|------|-------------|---------|----|---------------------------|-----------------------------|------------------|------------------|-------------|----|----|
| 10/5(土) | スタッフミーティング | | | | 受付開始 | はじめの つどい | スタンツの計画 | | タベのつどい 夕食 | ワークショップⅤ | ハートタイム (自由時間) | 消灯 (施設泊) | | | |
| 10/6(日) | ワークショップⅥ(バンガローの製作) ・棟上げ、・記念式典、・テープカット | | | | | | | | バーベキュー大会 (ワークショップ打ち上げ) | | ハートタイム (自由時間) | 消灯 (施設泊) | | | |
| 10/7(月) | ミステリーツアー (目的地を知らずにバスで旅行する) | | | | | | | | 夕食 自由時間 | フリートリップ計画 (フリートリップを班別で) | ハートタイム (自由時間) | 消灯 (施設泊) | | | |
| 10/8(火) | 退所 | 班別フリートリップ (湯布院から自然の家まで、班別でルートを決め、観光をしながら帰ってくる) | | | | | | | | フリートリップのふりかえり (旅行を振り返って) | | ハートタイム (自由時間) | 消灯 (施設泊) | | |
| 10/7(月) | フリートリップ 発表会 | おわりのつどい 解散 | | スタッフミーティング | | | | | | | | | | | |

第6回アクティブキャンプ

| 日付 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 |
|---------|----------------------------------|-----------------|----|----|------|-------------|----------|----|--------------|-------------------|------------------|-------------|----|----|----|
| 11/7(木) | スタッフミーティング | | | | 受付開始 | はじめの つどい | 交流バザー準備Ⅰ | | タベのつどい 夕食 | 交流バザー 準備Ⅰ | ハートタイム (自由時間) | 消灯 (施設泊) | | | |
| 11/8(金) | 玄海はまゆう学園(知的障害者施設)との交流バザー (昼食) | | | | | | 他施設への移動 | | 夕食 | スケート体験 すべるんるん① | ハートタイム (自由時間) | 消灯 (施設泊) | | | |
| 11/9(土) | 選択活動 温水プールorスケート | おわりのつどい 現地解散 | | | | | | | | | | | | | |

第7回See You!!キャンプ

| 日付 | 9 | 10 | 11 | 12 | 13 | 14 | 15 | 16 | 17 | 18 | 19 | 20 | 21 | 22 | 23 |
|----------|------------------|--------------------|----|----|------------------|-------------|-------------|----|--------------|-----------------------------|------------------|-------------|-------------|----|----|
| 12/12(木) | スタッフミーティング | | | | 受付開始 | はじめの つどい | 他施設への移動 | | 夕食 自由時間 | 体験スピーチの準備 (全キャンプをふりかえって) | ハートタイム (自由時間) | 消灯 (施設泊) | | | |
| 12/13(金) | スキー体験 すべるんるん② | | | | | | 移動 自然の家へ | | 夕食 自由時間 | スポーツ大会 他団体との交流 | 自由 時間 | 消灯 (施設泊) | | | |
| 12/14(金) | スキー体験 すべるんるん③ | | | | | | 移動 自然の家へ | | タベのつどい 夕食 | 体験スピーチ準備 スピーチ練習後ハートタイム | | | 消灯 (施設泊) | | |
| 12/15(日) | 動物 ビンゴ | 体験スピーチ会 記録ビデオ鑑賞 | | 昼食 | 不登校についての 公開講座 | | 閉会式 解散 | | | | | | | | |

2. 運営

キャンプのスタッフは、本部スタッフとして、総括指導者が野外教育専門家と大学教官2名、全体指導者が適応指導教室担当の指導主事1名、看護師1名、さらに、本部スタッフ及び班付きスタッフとし大学生・大学院生などの12～15名、事務局員として、自然の家職員7名であった。参加者は、4～7名からなる男女混合・異学年で構成され、5班編成であった。班付きスタッフは各班2名を配置し、特に、子どもたちに十分に目が届くように配慮した。

3. 調査対象

参加者は、何らかの要因で不登校傾向を示す児童・生徒で、一般公募により募集された。調査対象は、7回のシリーズキャンプに参加した児童・生徒で、各キャンプの全日程に参加し資料の完全な第1回出会いキャンプ25名(中学生：男子12名、女子10名、小学生：女子3名、全参加者28名)、第2回マリンキャンプ23名(中学生：男子13名、女子7名、小学生：男子1名、女子2名、全参加者28名)、第3回アイランドキャンプ23名(中学生：男子11名、女子8名、小学生：男子1名、女子3名、全参加者29名)、第4回オータムキャンプ25名(中学生：男子14名、女子9名、小学生：男子1名、女子1名、全参加者33名)、第5回ミステリーツアーキャンプ22名(中学生：男子12名、女子7名、小学生：男子1名、女子2名、全参加者33名)、第6回アクティブキャンプ31名(中学生：男子17名、女子11名、小学生：男子1名、女子2名、全参加者36名)及び第7回See You I!!キャンプ25名(中学生：男子15名、女子8名、小学生：男子1名、女子1名、全参加者35名)であった。

4. 調査内容

自己有能感(コンピタンス)は、篠原(1997)が作成した熊大式コンピタンス尺度(勝俣・篠原、2000; 2001; 篠原・勝俣、2000; 2001)を用いて調査した。この尺度は、他の有能感尺度(Harter、1982など)に含まれていない、意志・意欲・時間管理といった自然体験活動で変化が見られると思われる因子を測定できることから採用した。この熊大式コンピタンス尺度は、①認知的コンピタンス(知覚や言語など話ができる子どもがもつと考えてよい能力)、②社会的コンピタンス(自己開示性や友好性など遊べる子どもがもつと考えてよ

い能力)、③身体的コンピタンス(運動能力や身体的形態など運動が好きでな子がもつと考えてよい能力)、④総合的自己評価(情緒の安定や自己効力感など笑顔が明るい子どもがもつと考えてよい能力)、⑤生活コンピタンス(意志や主体性など意欲のある子どもがもつと考えてよい能力)の5つの因子で構成されている。

抑うつ傾向は、Birlleson(1981)のDSRSC(Depression Self-rating Scale for Children)を村田ら(1996)が日本語訳した自己記入式抑うつ尺度を用いて調査した。このDSRSCは、この一週間の気持ちについて、「とても悲しい気がする」といった18項目の質問から成っており、各項目は0点、1点、2点と評点され、フルスコアは36点となる。キャンプ前は原文のまま、キャンプ後は、このキャンプについての気持ちを調査した。

また、参加児童・生徒の各キャンプに対する事後の印象を調べるために、アンケート調査を行った。このアンケートは、このキャンプを振り返って、①楽しかった活動があったか、②うまくいった活動があったか、③活動がきつかったかという3つの項目であった。回答は、ぜんぜんなかった、あまりなかった、かなりあった、すごくあった、の4件法で行われた。

有能感と抑うつ傾向の調査は、キャンプ開始日の空いている時間及び最終日の終わり集い前後の時間に行った。事後の印象については、キャンプ最終日の終わり集い前後の時間に自己有能感(コンピタンス)と抑うつ傾向の調査と併せて行った。

結果と考察

1. 参加児童・生徒の各キャンプに対する事後の印象

各キャンプ全般の印象について、「楽しかった活動があったか」という質問の答えが図1である。これを見ると、ほとんどの子どもが各キャンプを楽しんでいたことがわかる。特に、第5回ミステリーツアーで、楽しい活動が大変多かったと答えている。これは、このキャンプの活動が、目的地に着くまで行き先が分からないミステリーツアーや子どもが自由に自分たちの行動や帰りのルート決定するフリートリップが中心で、子どもたちの思い通りの活動を十分に楽しんだためであろう。また、第7回See You!!キャンプでも楽しい体験が多かったとする子どもの割合が多い。これは、事前にスキーを楽しみにした子どもが多く、また、実

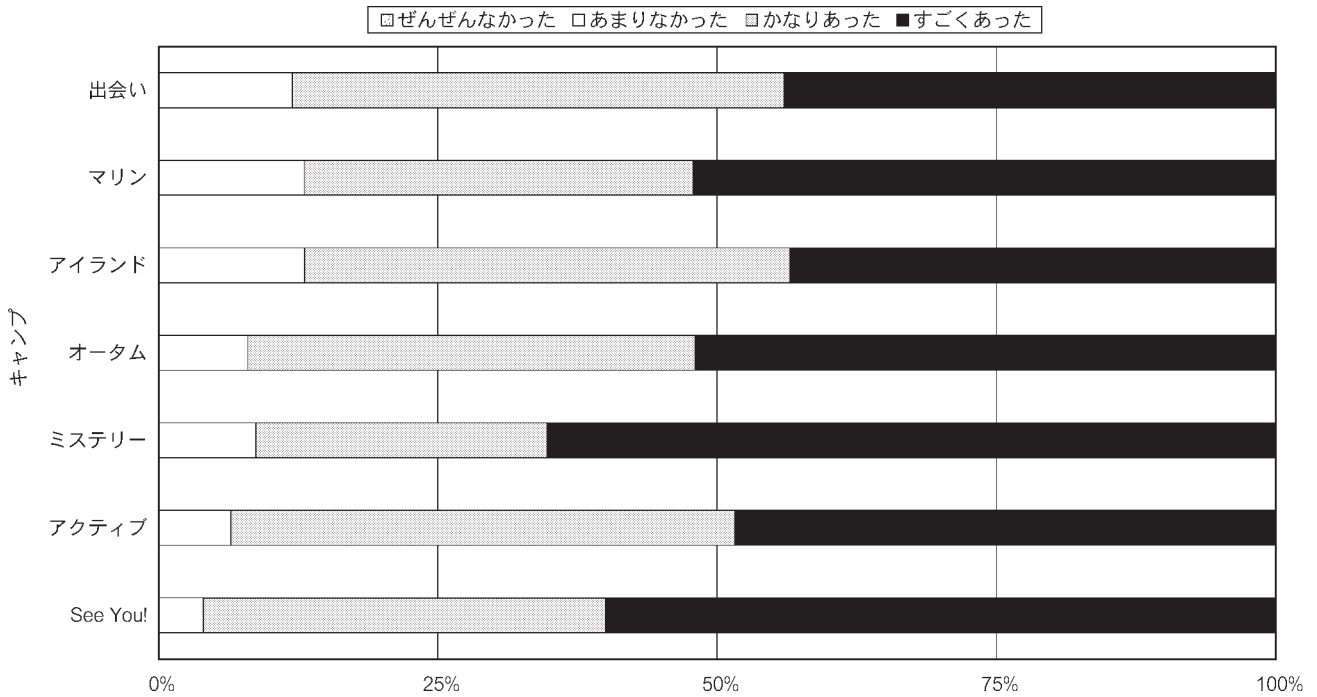


図1 各キャンプにおける活動の楽しさ

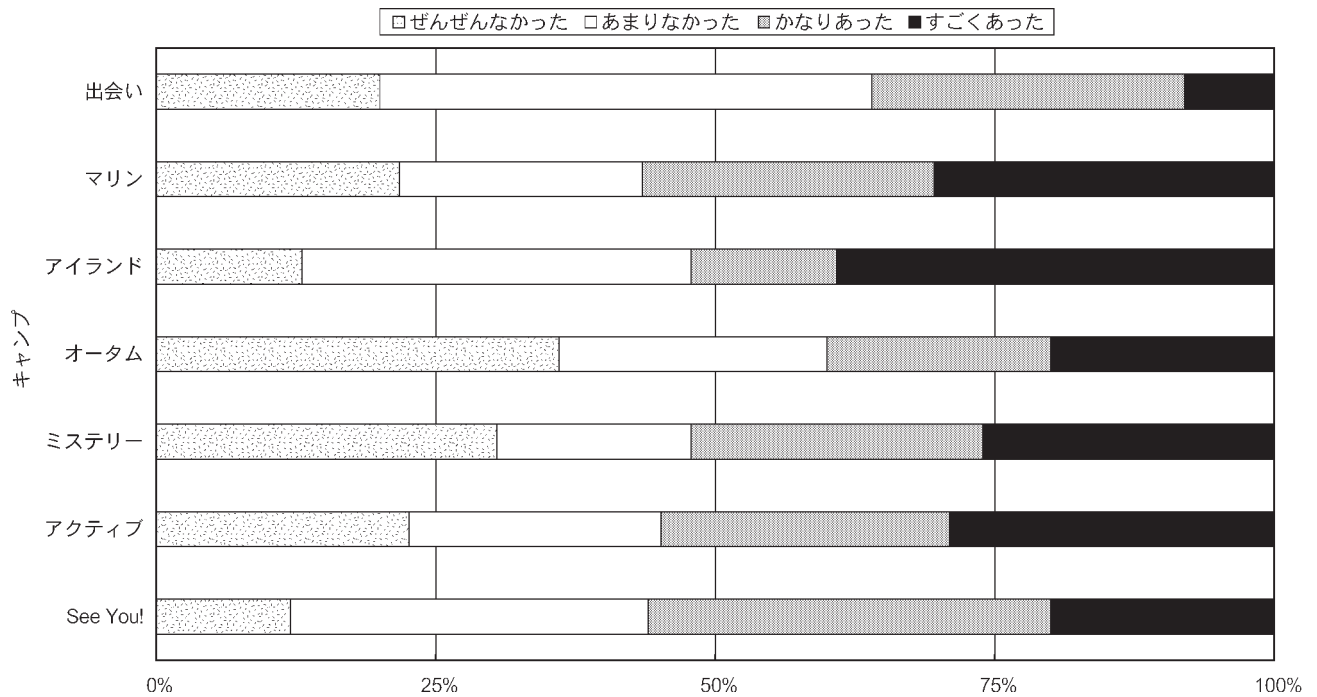


図2 各キャンプにおける活動のきつき

際にスキーを十分に楽しんだ結果だと考えられる。

図2は、「きつい活動があったか」という質問について、子どもが答えた割合である。第3回アイランドキャンプで、きつい活動が大変多かったと答えた割合が多い。これは、このキャンプが、大島での野外生活が中

心であり、野外炊飯やテント泊といった身体的・精神的に負担の大きい活動が多かったためであろう。逆に、第4回オータムキャンプにおいて、きつい活動が全然なかったと答えた割合が多い。これは、バンガローを建てるというグランドワークは、大人たちが中心に作

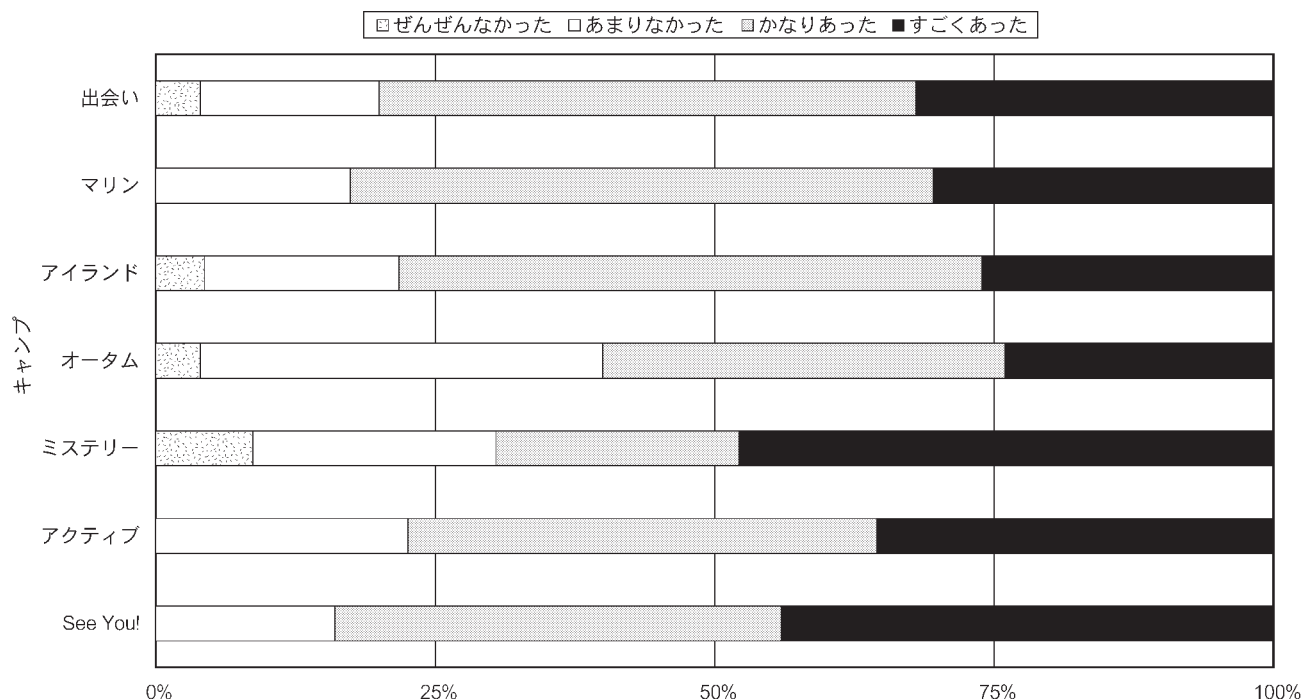


図3 各キャンプにおいて活動がうまくいったこと

表3 各キャンプにおける子供のコンピタンス（有能感）尺度と抑うつ尺度の得点変化

| 調査項目 | 出会いキャンプ ^{a)} | | マリンキャンプ ^{b)} | | アイランドキャンプ ^{c)} | | オータムキャンプ ^{d)} | |
|-------------|-------------------------|-------|-------------------------|-------------------|------------------------------|-------------------|------------------------|-------------------|
| | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 |
| コンピタンス(有能感) | | | | | | | | |
| 認知的 | 16.0 | 16.2 | 17.2 | 17.1 | 17.2 | 17.0 | 16.7 | 17.1 |
| 身体的 | 16.2 | 17.0* | 18.0 | 18.3 | 18.1 | 18.5 | 17.9 | 17.7 |
| 社会的 | 16.8 | 17.3 | 17.2 | 17.8 | 17.8 | 18.0 | 17.4 | 18.2 |
| 生活的 | 16.9 | 16.9 | 17.5 | 18.0 | 17.2 | 17.9 [†] | 17.1 | 17.6 [†] |
| 総合的自己評価 | 17.2 | 17.5 | 19.1 | 18.3 | 18.1 | 18.1 | 18.3 | 18.0 |
| 抑うつ得点 | 13.1 | 13.1 | 13.1 | 11.9 [†] | 12.5 | 11.7 | 11.8 | 13.0 |
| | a) N=25 | | b) N=23 | | c) N=23 | | d) N=25 | |
| 調査項目 | ミステリーキャンプ ^{e)} | | アクティブキャンプ ^{f)} | | See You!! キャンプ ^{g)} | | | |
| | 前 | 後 | 前 | 後 | 前 | 後 | | |
| コンピタンス(有能感) | | | | | | | | |
| 認知的 | 15.9 | 16.3 | 15.9 | 16.2 | 15.8 | 15.6 | | |
| 身体的 | 17.1 | 18.0* | 16.9 | 17.5 | 17.6 | 17.5 | | |
| 社会的 | 17.1 | 17.4 | 16.8 | 17.3 [†] | 17.4 | 17.5 | | |
| 生活的 | 16.3 | 17.0 | 16.4 | 16.9 | 17.0 | 16.7 | | |
| 総合的自己評価 | 18.3 | 18.0 | 17.0 | 17.3 | 17.6 | 17.2 | | |
| 抑うつ得点 | 11.8 | 10.7 | 12.8 | 12.4 | 13.7 | 14.0 | | |
| | e) N=22 | | f) N=31 | | g) N=25 | | | |

[†].05<p<.10 *p<.05 **p<.01

業する場面が多く、どちらかといえば子どもたちにとって受身の活動であったためだと考えられる。

図3は、「このキャンプで、うまくできた活動があったか」という質問について、子どもが答えた割合である。「楽しかった活動があったか」という質問と同じく第5回ミステリーツアーと第7回 See You!! キャンプで、うまくできたと答えた割合が多い。これは、フリートリップやスキーなどの活動で、うまくできたという成功体験が多いほど、楽しいと感じる機会が多かったことを反映していると考えられる。しかし、第5回ミステリーツアーでは、うまくいった活動が「ぜんぜんなかった」、「あまりなかった」と答えた子どもが30%もいる。これは、フリートリップのような子どもが自由に計画する活動では、積極的に計画を立案する子どもに引きずられ、受動的にその計画に従って活動していた子どもが、自分の意見が言えず、活動の達成感をあまり感じられなかったためだと推察される。また、第4回オータムキャンプでも、うまくいった活動があまりなかったとする子どもの割合が多い。これは先述のように、このキャンプの活動内容が、子どもにとって、どちらかといえば受身の活動が多かったためだと考えられる。

以上の結果から、子どもたちは各キャンプを十分に楽しんでいただと考えられる。特に、うまくいった活動が多いと感じるキャンプほど楽しいと感じる子どもが多かったことから、このようなキャンプでは、子どもが成功体験を多くできるような活動の工夫が必要だと思われる。

2. 自己有能感と抑うつ傾向

Birlesonの自己記入式抑うつ尺度は、得点が、10～15で普通、16以上で抑うつの傾向があると診断される(村田、1999;村田ら、1996)。全キャンプ前後の尺度得点の平均値を見ると、全て10～15点以内に収まっており、本キャンプの参加・児童生徒は、全体として抑うつの程度は一般的な子どもほとんど同じであると考えられる。

次に、各キャンプの前後における自己有能感と抑うつ傾向の変化を見るために、キャンプ前後の尺度得点に対応のあるt検定を行った。

その結果、第1回出会いキャンプ前後で、身体的コンピタンスに変化が見られ、キャンプ後に尺度得点が

有意に向上した($t(24)=2.34, p<.05$)。この身体的コンピタンスは、運動能力や身体的形態などの自己評価と考えられるため、キャンプの初回で、あまり慣れていないテント泊や野外炊飯など、身体的に厳しい活動を経験することによって、身体に対する自己有能感がある程度高まったと考えられる。

第2回マリンキャンプの前後では、抑うつ傾向の尺度得点に有意傾向ではあるが変化が見られた($t(22)=-1.72, .05<p<.10$)。このことから、このキャンプにおいて、海で思いっきり遊ぶ等の活動をすることで、やる気の無さや落ち込んだ気分といった抑うつ傾向が、少しは軽減されたと思われる。

第3回アイランドキャンプ及び第4回オータムキャンプでは、生活的コンピタンスにキャンプ前後で変化が見られ、どちらもキャンプ後、有意傾向ではあるが得点が向上していた(第3回 $t(22)=1.81, .05<p<.10$;第4回 $t(24)=1.96, .05<p<.10$)。この生活コンピタンスは、意志や意欲、時間管理といったことに関する自己評価であることから、大島での野外生活やバンガロー作りをすることで、生活一般に対する自己有能感が高まったと考えられる。

第5回ミステリーツアーキャンプでは、身体的コンピタンスにキャンプ前後で変化が見られ、キャンプ後、有意に得点が向上していた($t(21)=2.15, p<.05$)。第1回出会いキャンプと同じく、ミステリーツアーなどのアクティブな活動と、4泊5日という長期のキャンプを経験することにより、身体に対する自己有能感が高まったと考えられる。

第6回アクティブキャンプでは、社会的コンピタンスに、キャンプ前後で有意傾向を示す変化が見られ、キャンプ後、尺度得点が向上していた($t(30)=2.03, .05<p<.10$)。この社会的コンピタンスは自己開示性や友好性に関する自己の有能感であることから、スケートや水泳をすることや、特に、知的障害者との交流を行うことで他者を尊重する体験ができ、人間関係に対する自己有能感が高まったと考えられる。

最後に、第7回 See You!! キャンプでは、自己有能感と抑うつ傾向において、キャンプ前後で尺度得点に有意な変化は見られなかった。

以上、自己有能感と抑うつ傾向では、各キャンプ前後で若干の差が見られ、このキャンプ全体を通して子

どもにとって望ましい変化が見られた。この結果と参加児童・生徒の各キャンプに対する事後の印象の結果から、さまざまな体験ができ、年間複数回行われるシリーズキャンプは、不登校児童・生徒に対して一定の教育的効果があると考えられる。

しかし、全てのキャンプで自己有能感と抑うつ傾向が望ましい方向に変化するといった大きなキャンプの効果は、確認できなかった。

その理由の1つは、キャンプ活動の内容が乗馬体験や海水浴、ミステリーツアーなど楽しさを中心とした活動が多く、厳しくつらい活動が少なかったことが考えられる。キャンプ自体が楽しいことは、大変重要なことである。しかし、楽しいだけではキャンプの教育的効果は期待できない。子どもは、楽しい中でも厳しくつらい活動を克服し、活動目標を自ら達成して行く過程で、自己に対する自信が付き、自己有能感が高められる。このような視点から、今後、楽しいだけでなく、困難を克服したり、目標を達成したりする活動をキャンプの中に盛り込んでいくことが必要であろう。

期待していたキャンプの効果が確認できなかったもう理由の1つとしては、本キャンプの児童・生徒のほとんどが、複数年度にまたがって参加しており（全参加者の約50%以上）、活動自体が新奇なものと感じられていないことが考えられる。たとえば、海水浴などで、はじめて足のつかない深い海で泳げた子どもは、自己の身体能力や意欲などに自信を持ち、有能感が高まるであろう。しかし、その後、同じように深い海で繰り返し泳いでいても、有能感はほとんど高まらない。すなわち、キャンプ活動自体に慣れ、ルーティンワーク化しては一定の教育的効果は期待できない。そのために、毎年、新しくチャレンジしなければならない活動を盛り込んでいくことが必要であろう。あるいは、同じ活動を行うにしても、毎回同じ目標で取り組ませるのではなく、創意や工夫、努力を必要とする目標を子ども自身に設定させるような手だての工夫が必要であろう。以上の配慮をすることにより、より教育的効果が期待できるキャンプが可能だと思われる。

まとめ

本研究では、不登校傾向を示す参加児童・生徒の各キャンプに対する事後の印象と自己有能感及び抑うつ

傾向の調査から、さまざまな体験ができ、シリーズで年間通して行われるキャンプ活動が持つ教育的効果を明らかにしようとした。

その結果、成功体験が多くできたキャンプで楽しいことが多いと答えた子どもが多かった。このことから、できるだけ多くの成功体験ができるキャンププログラムの工夫が示唆された。

また、自己有能感と抑うつ傾向は、各キャンプ前後で、子どもにとって望ましい効果が認められた。このことから、キャンプ全体を通して考えると、本キャンプのようなさまざまな体験ができ、年間複数回行われるシリーズキャンプは、不登校児童・生徒に対して一定の教育的効果が見られると思われる。

しかし、全体として期待した以上のキャンプの効果は見られなかった。これは、本キャンプの活動がどちらかといえば楽しさ中心の内容が多く、克服や達成を伴う活動をあまり多く体験できなかったためだと考えられる。あるいは、本キャンプは、複数年度にまたがって参加している児童・生徒が多く、初めて体験する活動が少なかったためだと推察される。

今後、このようなキャンプでは活動内容の厳選と子どもキャンプに対する目標設定を明確にさせる配慮を行いながら事業を実施する必要であろう。

引用文献

- Birlesons P. (1981) The validity of depressive disorder in childhood and the development of self-rating scale. *Journal of child psychology and psychiatry and allied disciplines*, 22, 73-88.
- Harter, S. (1982) The Perceived Competence Scale for Children. *Child Development*, 53, 89-97.
- 平田裕一・叶俊文 (2001) 冒険的野外活動プログラムが児童・生徒の心理的側面に及ぼす効果について—青年の家主催事業における2年間のデータからの検討— *中京女子大学研究紀要*, 35, 89-99.
- 飯田稔 1994 キャンプ療法 *児童心理*10月号臨時増刊 金子書房、135-138.
- 飯田稔・井村仁・景山義光 (1988) 冒険キャンプ参加児童の不安と自己概念の変容 *筑波大学体育科学系紀要*, 11, 79-86.
- 飯田稔・井村仁・van der Smisssen (1986) 冒険キャ

- ンブにおける中学生の自己概念と不安の変容 筑波大学体育科学系紀要、9、91-101.
- 飯田稔・小嶋哲・有坂正 1991 登校拒否中学校のキャンプ集団における社会性と登校状況の変化 筑波大学運動学研究 7、1-7.
- 飯田稔・中野友博 1992 登校拒否児中学生の不安と自己概念に及ぼすキャンプ療法の効果について 筑波大学運動学研究 8、69-79.
- 飯田稔・中野友博・関根章文・布目靖則 1993 登校拒否児中学生に対する3年間の実験キャンプが親子関係に及ぼす影響 筑波大学運動学研究 9、37-47.
- 飯田稔・関根章文 (1992) キャンプ経験が児童の一般性自己効力に及ぼす効果 筑波大学体育科学系紀要、15、93-102.
- 井村仁 (1982) アドベンチャー・プログラム経験が中・高校生の自己概念と不安に及ぼす影響 筑波大学体育科学系紀要、5、59-70.
- 勝俣暎史・篠原弘章 (2000) 熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性：小学生の問題行動との関係 熊本大学教育学部紀要、人文科学、49、109-119.
- 勝俣暎史・篠原弘章 (2000) 熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性：小学生の問題行動との関係 熊本大学教育学部紀要、人文科学、50、189-202.
- 川村協平・山田英美・鳴海正也 (1994) 児童・生徒の自然意識に及ぼす野外活動の影響 山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要、2、65-72.
- 松永太郎・飯田稔・井村仁・関智子・落合良行 (1999) キャンプ実習体験が女子高生の友達づきあいに及ぼす影響 野外教育研究、2、21-28.
- 村田豊久 (1999) 子どもの心の病理とその治療 九州大学出版会：福岡、pp.167-189.
- 村田豊久・清水亜紀・森陽二郎・大島祥子 (1996) 学校における子どものうつ病 最新精神医学、1、131-138.
- 西田順一・橋本公雄・徳永幹雄・柳敏晴 (2002) 組織キャンプ体験による児童の社会的スキル向上効果 野外教育研究、5、45-54.
- 岡村泰斗・飯田稔・星野敏男・穴戸和行 (1996) 環境教育プログラムを導入したキャンプの効果—参加者の自然に対する態度、イメージに着目して— レジャー・レクリエーション研究、33、1-6.
- 関根章文 (1994) キャンプ経験が児童の Locus of Control と一般性自己効力に及ぼす影響 筑波大学体育科学系紀要、17、177-183.
- 関根章文・飯田稔 (1996) キャンプ経験が児童の自己概念と己一般性効力に及ぼす影響 筑波大学体育科学系紀要、19、85-89.
- 篠原弘章・勝俣暎史 (2000) 熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性：小学生の「感情・態度」および「希望」との関係.熊本大学教育学部紀要、人文科学、49、93-108.
- 篠原弘章・勝俣暎史 (2001) 熊大式コンピタンス尺度の開発と妥当性：中学生の「感情・態度」および「希望」との関係 熊本大学教育学部紀要、人文科学、50、203-217.
- 服部洋子 (1984) 未熟成と経験欠乏症 精神衛生、大阪精神衛生協議会、29、2-13.
- 橘直隆・小嶋哲・寄金義紀・吉田章・井村仁 (1991) フロンティア・アドベンチャー経験が小中学生の自己概念及び自然認識に及ぼす影響—静岡県主催事業を事例として— 筑波大学運動学研究、7、61-68.